

書評

橋爪大三郎(東京工業大学)

深化と発展を続け、見ようによっては拡散と混乱を深めているとさえ言える、わが国の社会学の最先端を俯瞰したければ、本書を読むとよいだろう。それぞれの方法や立場にもとづいた根本的な問いかけと、それへの真剣な取り組みを目撃することができる。その取り組みは、同時代の世界と同調しており、同時代の世界に先駆けている部分さえあると思われる。

本書は、『理論と方法』の前後3回にわたる特集、「<社会>への新たな知」(27号、2000年6月)、「社会学と数理的視座」(28号、2000年10月)、「実証の姿」(29号、2001年3月)を、2冊に再編集したもの。21本の論文のうちから、いくつかを抜き出し、加筆修正を求め、書き下ろしの論文数編を加えたという。

全体の基調をなすのは、盛山和夫「構想としての探求 理論社会学の再生」(上巻第1章)である。盛山は、機能主義の退潮を、「機能主義が社会的世界についての自然科学的理論を構築しようとしてそれに失敗したから」(上:25)だとし、「社会学の知識を構成する諸概念が対象世界である社会的世界に生きる人々の生きられた諸概念から究極的には独立ではない」(上:18)ことに注意をうながす。この意味で「社会学には自然科学と異なる再帰性という問題がある」。そこで、社会学が「普遍的に価値ある知識をめざす」には、「純粋に経験科学であろうとすることを放棄し、望ましい社会的世界を探求する規範的な社会構想の学であると再定義する」(上:29)べきだと、盛山は結論する。

盛山が再帰性ということばで言おうとしたのとはほぼ同じことを、佐藤俊樹「閉じえぬ言及の環 意味と社会システム」(上巻第5章)も指摘する。佐藤は、ルーマンのシステム論が、「単位行為の組み合わせとしての相互行為 interaction」から社会システムが構成されると考えるパーソンズの世界システム論からいわば「言語論的転回」をとげて、

理論と方法

2006-3-①

みずからを生成する相互作用システムに焦点をあてたものになっていることを、強調する。何がシステムの要素であるかは、システムが決めるが、何がシステムであるかは、システムの要素によって決まる。システムの要素がつぎつぎに接続していくという境界条件が、システムの構造をもたらししている。

大澤真幸「<社会性>の起源・序 個と社会」(上巻第4章)も、よく似たロジックを追尾している。大澤によれば、チンパンジーやボノボの群れは、互いのコミュニケーション、すなわち、間身体的な連鎖ともよぶべきものを構成しはする。しかし、そこから《完全に人間に固有なく社会性>が構成されるためには、第三者の審級が、間身体的な連鎖から離陸し、固有の持続的な実体として措定されなくてはならない》(上:97)のに、それが果たされないという。社会を構成する《原始的否定性》(近親相姦の禁止のように、システムの境界に位置している)は、行為を可能にし、行為が互いに接続する条件を与えているのである。

社会が再帰的で自己生成的な性質をそなえており、社会学の理論や実証的研究はそのことを踏まえて行なわれるべきである——本書ではこのことが、多くの論者の共通理解になっている。これは本書に限らず、21世紀初頭の時点における多くの国々の社会学者の、共通理解でもあろう。

経済学やそのほかの社会科学のなかで、社会学だけが特に強くこうした再帰性を意識しているように思われる。それは、「1970年代半ばからの脱物理学モデル化」(佐藤 上:101)の直接の結果かもしれない。いずれにせよ、この結果、社会学の理論を構成することは、きわめて困難な作業になる。

理論が、物理学の場合に典型的なように、一定の前提から論理演繹的に導出される一連の命題(形式的なシステム)のことだと考えるならば、こうした再帰性を理論に盛り込むことは困難である。そして、社会が再帰的な性質をもっていれば、

その再帰性は、社会学(社会について言及し説明することを試みる理論、ないし言説)のなかにも反映せざるをえない。それを反映させつつ、社会学の構えを維持しようとする、その可能性はつぎのいく通りかになるだろう。

第一は、社会は再帰的であり自己生成的であると主張する「理論」をたてること。この主張は、形而上学的な断定にとどまると思われる。なぜならば、この主張は、社会は再帰的でも自己生成的でもない(社会は通常の意味での経験的な対象である)とする主張と、対抗関係におかれるわけだが、みずからの主張を論理演繹的な理論(形式的なシステム)に表現することができず、したがって、みずからの主張が現実に妥当すると示すことができないからである。ルーマンのいう社会システムは、こうした形而上学のマジックワードではないだろうか。

第二は、社会についての理論をたてることは不可能であると断念し、そのかわりに、再帰的・自己生成的に社会に関わる実践としての社会学に従事すること。たとえば、坂本佳鶴恵「差異の政治 ポストモダン・フェミニズムの認識地平と戦略として可能性」によると、「ポストモダン・フェミニズムは、女/男というカテゴリーを疑いなく使用することに批判の目を向ける」(下:191)。女/男の性別は、そのほかのカテゴリーと同じく、権力関係を含んでいる。その政治的効果を打ち消すため、パロディ戦略を取る。また、赤川学「言説の歴史を書く 言説の歴史社会学の作法」の整理によると、「対話的構築主義では、インタビューという場において語り手(インフォーマント)だけでなく、聞き手(分析者)もまた語りと現実の構築に関与することが強調される」(下:130)。このような社会学は、もはや政治、運動にほかならず、それ以外の言論や実践と同列に置かれることになって、みずからが語ることの「正しさ」を保証できない。

いずれにしても、大部分の社会学者が、社会学のあるべき姿と認めうるものとは距離がある。

赤川は、言説分析が「科学」である条件に、注意を払っている。《言説の歴史社会学にあつては、人間の活動の痕跡としての言表や言説が、それを語った(とみなされる)当事者が不在という条件下で、分析者の眼前に残される…。分析者が言説そのものの構築(生産)に直接に関わることはない》(下:131)。

このように考えてくると、数理社会学の「理論と方法」が、どのように社会学のあるべき姿を与えるのか、真剣に考慮しなければならなくなる。数学は、まぎれもない形式システムである。それが、モデルの役割を果たすならば、それはせいぜい社会の「部分」を表現できるにすぎない。たとえば、社会的文脈から切り離された、功利的な主体による個人主義的な行動の分析モデルや、ゲーム理論のような特殊なモデルや、データの統計処理など。それに対して、理論の中核的な部分を数理モデルによって表現することは、きわめて困難であり、実はまだほとんど成功していないということがわかる。

数理社会学会が、<社会>の知をめぐる「理論と方法」について、このように意欲的な特集を組んだことに敬意を表する。それと同時に、本書の論者のさまざまな立場や、彼らが紹介する社会学の最先端の議論が、ひとつの可能性と限界をみせていることに、社会学の現状がまったく表現されていることもまた確かなのである。

SUNDAY NIKKEI α

【第三種郵便物認可】

2006年(平成18年)12月15日(金曜日)

読 書

橋 爪 大三郎

瀬尾育生『戦争詩論』9  
10-1945』(平凡  
社)。戦時下、モダニズム  
やプロレタリア詩の一流の  
詩人たちが進んで戦意昂揚  
詩を量産した。蓋をされた  
過去の、詩の質を問題とす  
るスリリングな考察。藤田  
嗣治が描いた戦争画と、戦  
争詩を対比する視点が興味  
深い。

え、応用できる精神分析の  
解説書になっている。(は  
しづめ・だいちあやみ氏)  
東京工業大学教授・社会学  
専攻

市野川容孝『社会』(岩  
波書店)。小泉政権誕生の  
ころを境にして、人びとの  
頭からすっぽり抜け落ちて  
しまった「社会」という言  
葉を、その来歴にさかのぼ  
って再発見し、擁護しよう  
とする試み。やわらかで暖  
かい読後感を残す。

斎藤環『生を延びるため  
のラカン』(バジリコ)。  
難解の極み・ラカンの学説  
が、サイトー先生の手にか  
かることでまるでわかりやす  
くなった。▲日本一わかり  
やすいラカン入門▼の宣言  
どおり、豊富な実例をもと  
に、悩み多い十代の高校生  
・大学生が、自分の頭で考

二〇〇六年の収穫

生のもものと火を通したもの

クロード・レヴィ・ストロース 著

構造主義を唱えて、世界に大きな  
衝撃を与えたレヴィ・ストロース。  
その名著『神話論理』の第一巻『生  
のもものと火を通したもの』が出版さ  
れた。待望の翻訳だ。

南米インディアン・ボロロ族やジ  
エ族の神話を中心に、二百近くを取  
り上げる。これを扱うレヴィ・スト  
ロースの方法が独創的だ。似たよう

生のもものと火を通したもの



(早水洋太郎訳、みすず書房・  
八、〇〇〇円)

▼著者は08年ベルギー生まれ。  
文化人類学者。著書に『悲しき  
熱帯』『野生の思考』など。

でいて違っている神話同士を、要素  
のいくつかが入れ替わっただけの、  
音楽の変奏曲のようなものだと思  
います。そして、これら変奏曲の全体の  
背後に、無文字社会の人びとの無意  
識の思考の秩序(構造)が隠されて  
いると考える。レヴィ・ストロース  
以前に、こんなふうに神話を扱える  
と思っただ人類学者はいなかった。革  
命的な学問の誕生である。

一見して支離滅裂な物語の背後  
に、隠れた秩序を見つけようとする  
点で、この研究はフロイトの精神分  
析に似ている。違うのは、フロイト  
がエディプス・コンプレックスのよ  
うな具体的欲望を想定して夢を解釈  
するのに対して、レヴィ・ストロ  
ースは神話の背後に何も想定しない点  
だ。

神話は音楽に似ている、とレヴィ  
・ストロースは言う。神話は、宇宙

神話に隠れた思考秩序たどる

や人類の起源をめぐるとさまざま  
語からなっている。それらは比例式  
のような関係で結ばれ、始めも終り  
もない円環になっている。音楽は時  
間のなかで聴き取るしかないが、時  
間を超えた構造を本質とする。神話  
も同じであるという。

『生のもものと火を通したもの』は、  
ボロロ族の「鳥の巣あさりの神話」か  
ら始まり、その変奏、そのまた変奏  
……と続いて元に戻る。どの神話か  
ら始めても同じことだった、とレ  
ヴィ・ストロースは言う。大事なのは、  
その地域の神話をひとつ残らず取り  
上げ、全体が数学の変換群のよつに  
結ばれているのを証明することだ。  
そもそも知りえないはずのことを  
語る神話の試みは、語るたびにゆら  
ぎ、変奏をうみだす。その秩序は、  
宇宙と自然に囲まれて文化を営む人  
間の、思考の規則を反映しているは  
ず。すなわち、神話学は、人間が人  
間であるための永遠の条件を説明す  
る科学にはかならないのだ。

東京工業大学教授 橋爪 大三郎

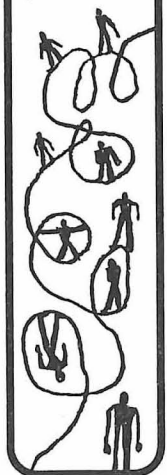
# ポケットから



『仮面の告白』『金閣寺』『豊饒の海』などをつぎつぎ発表した小説家・三島由紀夫。スターとして華やかな一時代を築き、一九七〇年に市ヶ谷で不可解な自死をとげてしまった。生きていた間の三島由紀夫が嫌いだっ」と語る作家の橋本治さんが、『三島由紀夫』とはなにもなかったのか?その謎に挑む。

文体こそ柔らかだが、正確・厳密で、遠慮がない。マッチョな外見の三島由紀夫の内側に踏み込んでいく。赤裸になつた三島は貧相で、橋本さんのほうがすっぽりと雄々しく見える。

## カジユアル読書



橋本さんによると、三島は同性愛者だが、本質はそこにはない。根底にあるのは「自分を愛そうとする者に死を命じた」という欲望…すなわち、「自分の恋の不可能」に対する欲望だ。ひねくれて

自分の正しさに陶醉する。こんな構造をもつ三島の作品は、《幻想小説と化した私小説なのだ。三島が戦後日本を憎み、観念的な美の世界に閉じこもったのも、戦後が《うくな始まり方の

事の中…誰かが自分の上に覆いかぶさる…自分は…生きていた。その自分の真先にすべきことが、自分を守って死んだその人を否定することであるとしたら…戦争に負けるとは…そういう「ねじれ」を生る条件とするところまである。《こうして戦後の日本人は、シキルとハイドのような人格分裂に陥った。謝罪と問題発言が繰り返される背景だという。そこで加藤氏は、分裂を克服するために、日本の三百万の死者を悼むことを先に置いて、その哀悼をつうじてアジアの二千万の死者への哀悼…にいたる道は可能か?を課題にする。まっとうな議論だ。《この案内人にならうといつても大丈夫とする文庫解説を、内田樹氏が寄せられている。

竹内洋『丸山眞男の時代』は、同じく戦後のもうひとりの巨人を紹介している。

- ①橋本 治「著」 「三島由紀夫」とはなにもなかったのか (新潮文庫・6000円)
- ②加藤 典洋「著」 敗戦後論 (ちくま文庫・9900円)
- ③竹内 洋「著」 丸山眞男の時代 大学・知識人・ジャナリズム (中公新書・9000円)

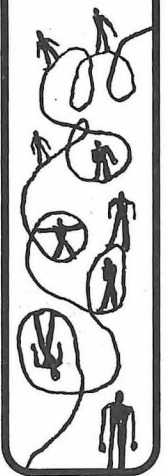
# ポケットから



馬立誠さんは、勇気ある人物だ。人民日報の著名な記者だった二〇〇二年当時の論文「対日関係の新思考」は、すぐに翻訳が「文芸春秋」「中央公論」に掲載され、大きな反響をよんだ。だが中国では、インターネットで「民族の裏切り者」などと非難が集中、袋叩きになった。それでもへこたれず、まごめたのが本書『謝罪を越えて』である。

たび重なる反日デモなど、「愛国」を振りかざす非理性的な妄動」が統廃している。こうした《無責任な行為は中国の基本的利益を損ねている》と、馬さん

## カジユアル読書



馬立誠「著」 謝罪を越えて 新しい中日関係に向けて (文春文庫・5500円)

清水 美和「著」 中国が「反日」を捨てる日 (講談社+α新書・9100円)

寺西 俊一「監修」 環境共同体としての日中韓 (集英社新書・7350円)

東アジア環境情報発信所「編」

は憂慮する。国際舞台に登場した中国は《理性大国、責任大国、バランス大国にならねばならない》。対日外交も、《七二年から〇一年にかけて…二十一回も謝罪している》のだから、これ以上歴史問題にこだわるのはやめるべきだ。《中国の…現実的な道はただ一つ…米國と緊密な関係を維持し…同時に、日本との関係を改善…することである》。

まことに正論である。でもこれが通ら

ない。いまの日中関係はむずかしい。清水美和さんの『中国が「反日」を捨てる日』は、軽いタイトルに似合わず、しっかりと中国の指導部や民心の動向を見極めた本格的なレポートだ。

反日デモは、政府が仕組んだのも、政府への民衆の不満のはけ口でもない。指導部の内部対立が背景である。〇二年、胡錦濤総書記は、対日柔軟路線へ転換を図った。「対日関係の新思考」論文

も、そのサインだったかも知れない。でも日本側は、動かなかった。そこへ、政権内の失地回復をねらう江沢民ら強硬派が巻き返しをかけた。インターネットに過激な対日批判を書き込む、若い世代の《大衆的民族主義》が、追い風になった。選挙で民意の洗礼を受けない中国では《共産党政権の基盤が脆弱なだけ、大衆的民族主義に迎合する傾向が強まり、現実的な外交を目指す協調派は窮地に追い込まれている》。そんな危険な流れを丁寧な取材で裏付けていく。

『環境共同体としての日中韓』は、環境問題なら東アジアの協力関係が築けるのでは、という提案だ。でも日本側が環境問題に期待をかけても、中国ではエネルギーや経済分野の協力を望む声は圧倒的、というデータを最近目にした。ああ、こどもすれ違い、なのかも知れない。